

# 中国内陸農村訪問調査報告 (9)

内山雅生・祁 建民

The Report of House-to-House Investigation in Rural Community of Inland China (9)

Masao UCHIYAMA and Jianmin QI

## 概 要

本稿は、2017年9月に筆者をはじめとする中国農村研究者が中国山西省農村と及び「四社五村」で実施した聞き取り調査の報告書の一部である。老農民・幹部経験者・村落婦人・農村教師など農村の諸階層から聞き取り調査を行い、1940年前後を起点とする70余年間の農村社会経済変革の歴史的過程を追跡した。その際に、農民との質問応答録を原則としてそのまま収録することによって、村落社会経済の多様な面に注目し、村民の視点に立った家族社会史・村落経済史の再構成を目指した。

キーワード：中国内陸農村、個人史、家族関係

2017年9月に、筆者をはじめとする中国農村研究者は、中国山西省農村で聞き取り調査を実施した。また、山西省H市「四社五村」と呼ばれる地域の民間生活用水組織及び地方政府の水利行政機関を訪問した。四社五村の水利組織は明代から開始されたといわれ、1950～70年代の集団化を経て、今もその生活用水（湧き水）の水権をめぐって、国家水利機関の管理・介入に抗して、自立的な運用を保っている。なお、以上の訪問調査は、山西大学中国社会史研究センターの協力を得て、日中両国の共同研究として実施した。本稿でも『中国内陸農村訪問調査報告 (1)』と同様に、プライバシーの保護に配慮して村民の実名の表記は極力避けるようにした。

このプロジェクトは、2015年より5年間の予定で開始された、平成27年度基盤研究 (B) 「個の自立と新たな凝集力の中で変貌する現代華北農村社会システムに関する史的研究」(研究代表者 内山雅生・宇都宮大学名誉教授) と2018年より5年間の予定で開始された、基盤研究 (B) 「社会主義経済体制下の中国農村における社会環境の特質と変容に関する再検討」(研究代表者 弁納才一・金沢大学教授)、及び2018年04月～2023年03月の基盤研究 (B) 「村落档案資料を用いた近現代中国華北農村社会史像の再構築」(研究代表者 田中比呂志・学芸大学教授)、2018年04月～2023年03月の基盤研究 (C) 「現代中国の『権威主義体制』と水環境汚染」(研究代表者 祁建民) によって実施している。

## 一、山西省晋中市靈石県JZ村

### CTS

訪問日時：2017年9月20日午前

訪問者：祁建民・内山雅生

訪問場所：椒仲村村民委員会

・76歳、午年。

(家族)

- ・妻のCRXは70歳、子年。孝義から婚家した。
- ・長男は本村の農民。次男は本村で医者。長女も本村で結婚。次女は村民委員会のメンバーで、婦人会主任。三女は靈石の石炭運輸会社の職員。四女は榆次の農家に嫁いだ。
- ・父はCJA、母はQFY、靈石県城の人。父は解放前、山の斜面7、8畝を持つ貧農。

(学歴)

- ・小学校4年、高級小学校2年、初級中学2年。卒業前に退学して帰村。鉄道建築会社に就職。当時は日本軍の占領時期で、白晋路の祁県東から長治までの鉄道の復旧を目指したが完成しなかった。1959年から60年まで、石太線の複線化に従事し、完成後省の第二建設会社に就職し、半年勤務した。1960年、農業建設支援のため帰村し、1960年から5年間、大隊の会計に従事した。2004年に入党した。

(困難期)

- ・帰村して就職した建築隊では月に60斤の食料をもらった。村では1日1斤の毛糧（加工していない食糧のこと）をもらった。まだ村には大食堂があり、1日2食支給された。ほとんどがトウモロコシだった。そこで芋の茎を干して粉にして食べた。野菜は酢菜（漬物）、拉面瓜、白菜など。
- ・1961年3月に大食堂が解体した。この村では一人が栄養不足で死んだ。
- ・1964年の四清運動では、特に批判はなかった。一部の幹部が自己批判していた。私は大隊の会計から小隊の会計に配属されたが、着任しないまま1966年に人民公社の中心病院で一年間医学を学び、赤脚医（裸足の医者）となった。民兵連隊衛生員の養成のために、病院での研修終了後、連隊衛生所で6年間勤務し、2人の薬剤師の一人となった。
- ・1972年に毛沢東が「6・26指示」を打ち出し、連隊衛生所が解散され、生産隊での医療を中心とするようになった。
- ・1967年から70年まで、村の革命委員会の主任となり、70年から74年まで村の治保主任、77年から82年まで貧農協会主任、85年から95年まで村の炭鉱建設の主任、96年から経済合作社の石炭販売担当。97年から村民委員会事務主任、計画生育担当副村長。2008年には67歳となったので、村の幹部への選挙に参加せず、村の医者に専念した。2014年より「物業会計」として新しい団地についての「北山移民搬遷項目」に所属した。
- ・1979年に靈石の衛生学校で一年間研修し、80年に「職称証医師」となった。（重い患者が出た時は）靈石の人民病院と連携する。介休県の汾西鋳務局の病院は、靈石の人民病院より近く、レベルは上だ。

(入党)

- ・1960年に帰村した時に、村の幹部の事件に関して、人民公社の工作隊の人が責任を私に押し付けたので拒否してトラブルとなった。65年に村の書記が入院し翌年病死したので、代理の書記が隣村から派遣されてきたので入党は中止となった。

- ・1986年に入党の動きが出てきたが、妻が四女を出産し、計画生育に違反したので、入党は2004年となった。

（計画生育）

- ・計画生育は97年から担当した。95年から96年が一番厳しかった。違反者は家具や食料を没収された。違反者には前年度の村民の平均収入の4倍の罰金が科せられた。
- ・検査は年に2回、婦人科医が「育齡婦女」への妊娠検査を実施した。98年から超音波による検査をした。村の女性の計画生育服務員が同席した。（検査を受けない者に対しては）副村長が話に行き、それでもダメなときは村長や書記が当人に検査を受けるようにさせた。

（文革時の医療）

- ・1972年から合作医療制度が始まった。社員は、診察・外出診察費・手術・消毒の4項目について無料となった。72年以前村には医者がないので、北山郷医療所の3人の医者が巡回医療をしていた。病気の大半は胃病。トウモロコシの食べ過ぎが原因。

（文革）

- ・靈石の紅衛兵には2つの派閥があった。一つは「総駅」でもう一つは「兵団」だ。村にも二つの派閥があり、村の宗族や個人間で争いをした。村では武闘は起きなかったが、靈石では起きた。この村の宗族は、蔡姓が60%、馬姓が20%、その他が20%で、蔡姓と他姓との争いが大半。

（水利）

- ・10メートルの深さの井戸があったが、2005年に炭鉱の影響が出た。1980年代から水道が施設されたが、飲み水には深さ100メートルの井戸の水が使われた。飲料用に各家庭で浄水器が購入されている。水道の水はあまり良くない。以前は近くの静升河の水を利用していたが、現在では水道の水を使う。介休県では綿山にダムを造ったが、靈石は利用できない。

（土地）

- ・1982年に分地された。その後貸し出しが始まった。95年に旧村にあった8畝の土地について、二回目の分地がされたが、現在では統一経営されている。現在ではクルミの栽培が行われている。土地は旧村のまま、炭鉱局が林業を経営している。

## 二、四社五村

### 王 宝虎

訪問日時：2017年9月21日午前

訪問者：祁・内山

訪問場所：義旺村王宝虎自宅

（昨年からの変化）

- ・仇池社が四社五村から離脱して、三社四村となった。南李社、義旺社、杏溝社の三社と孔潤村。仇池社が離脱した理由は、水を利用しなくなっても、金を負担していたからだ。今年は南李社が、小祭と大祭を開催した。仇池社は小祭には参加していたが、大祭の食事は欠席した。仇池社は水権も放棄したので、仇池社の8日間の水権は残った村に2日間ずつ加えた。南李社が9日間、杏溝社が8日間、義旺と孔潤が合わせて11日間、合計28日間だ。
- ・仇池社は祭りに経費を負担することとなれば、来年も欠席するという。年間4200～4300元を負担していた。8日間の水権も他村に売却していた。しかし近年他村もその水を必要としなく

なった。

- ・杏溝村の楊二娃が、仇池社の水を買って閻家庄に売っていた。ところが、昨年の後半から義城村から水路ができた。水利局の金により閻家庄までパイプで給水された。閻家庄では水を購入しなくなった。
- ・仇池社の離脱後でも名称の変更はない。水を利用しない南李社が今後も負担するなら離脱するかもしれない。
- ・村民の減少により水を利用する者も少なくなった。義旺と杏溝の二村は水の利用を続ける。水利のメンテナンスは水利局から助成金が支給される。
- ・井戸水の利用には電気代がかかる。
- ・杏溝は分水を利用せず、直接水利局から給水している。
- ・(高速道路でのトラックへの給水は) エンジンの冷却用として大型トラックには10元、小型トラックへは5元で売っている。1日100～200元の収入。(王さんの)叔母が水の販売を担当。いつもは妻がするが、娘を幼稚園に通園させるため叔母に頼んでいる。

(小祭と大祭)

- ・今年の大祭と小祭の不足分4,000元は南李社が負担した。来年は義旺村が主村となる。大祭では仇池社と南李社は演劇をしないで、会食だけだった。経費を削減するために、村の党員活動室の紅白理事会のコックが食事の用意のために通ってきた。義旺や杏溝では演劇を続けている。杏溝では伝統劇を一日5回、義旺では7回上演する。それを3日間4夜にわたって行う。1回に2,000元の費用がかかる。
- ・演劇を観る村民は減っている。若者は観ていても内容がわからないので観客が減った。仇池社との付き合いは減った。しかし、橋西村の村官の大学生は、四社五村の文化に興味を持っていた。しかし村長と書記は金を使いたくないのだ。南李社が電話をしても来なかった。
- ・杏溝村の水路には洪洞県の水利局が数十万元負担した。杏溝の会首(村長)はGX。

(村官)

- ・村官は全ての村にいる。義旺の村官も郷から派遣されてきた。毎日村にいるわけではない。(村官の役割は) 道路の修復など郷からの仕事を進めること。県政府から新農村建設費が支給される。積極的に仕事をする村官もいるが、遅れた者もいる。

(王さんの家族)

- ・妻はYWX、1990年生まれ、義城孫の出身。父は王水牛、80歳、寅年。母はMQY、74歳。河南省からの移民。祖父の代から。祖父は200畝の土地を買った。石臼を作る石匠だ。1940年代に祖父が河南省新郷地区の延津県から移り住んだ。干ばつの時、1942年ごろか、南李村のヤオトンに住んでいたが、1960年代に義旺に移ってきた。
- ・祖父の200畝の土地は義旺と南李の境界にあった。
- ・祖父はアヘン中毒となり、土地を売り払った。解放時には貧農だった。
- ・父には石匠の技術がなく、農業に従事した。父には兄がおり、石匠となっている。石臼を削りなおす仕事をしている。名前はWYN、84歳で元気だ。妻はずいぶん前に亡くなった。
- ・自分の兄は王黒虎、1962年生まれ、寅年、本村で農民。妻も義旺の出身で、ZGM、やはり1962年生まれ。水の番をしている叔母は父の四番目の妹のWCH。長女と三女は亡くなって、次女が洪洞県にいる。

(リンゴ)

- ・リンゴ園に1時間40～50円で灌漑。パイプは水利局のもの。
- ・リンゴの冷蔵庫を崔三虎と共同で村の党委員会の近くに建設中。100万斤のリンゴを保存でき

る。80万円の費用がかかる。資金の70％は崔の金。残りの30％は友人からの借金。水で冷蔵するので、電気代はかからない。崔のリンゴ園は4畝。

- ・私の土地は息子のWW（24歳の時）に渡した。4畝の土地でトウモロコシを栽培している。嫁は義城の人。同じ年。自由恋愛だ。

(定期市)

- ・義旺では旧暦の2・5・8の日。洪洞県では1・4・7の日。

(車の購入)

- ・妻の楽しみのために新車を購入した。十数万元した。妻は運転免許を持っている。自分は持っていないが、交通警察に友達がいるから大丈夫。娘を幼稚園に送り迎えするときはバイクを使う。

### 三、靈石県GYT村

LNZ

訪問日時：2017年9月22日午前

訪問者：祁建民・内山雅生

訪問場所：溝峪灘村村民委員会

- ・79歳、寅年。

(家族構成)

- ・妻はLZ、74歳、本村人。長男は51歳、靈石人民銀行に勤務。次男は47歳、煤運会社に勤務。三男は40歳、靈石医院の医師。
- ・私は中学卒業後、人民解放軍に20年間従軍した。1958年から1979年まで。主に鉄道兵として内モンゴルや湖南省、四川省、新疆などに行った。以前あなた方からインタビューを受けたことがある。

(党员)

- ・除隊後、靈石の煤運公司（石炭運輸会社）に就職した。99年に帰村して荒地を開墾した。体を鍛えるため、0.7畝の土地に野菜を栽培し、自家消費している。
- ・妻との二人に生活。党籍は靈石の煤運公司に所属。年回1～2回ほど党支部の活動に参加している。78～80歳の老党员を集めて年に1、2回学習会をする。
- ・党費は年間60元、毎年年末に納入している。昔は100元以下の収入だったら、給料の0.5％を納入し、100元以上だったら1％を党費として納入していた。
- ・社会主義の核心については、専門の資料はなく、新聞やテレビのニュースを見ただけ。
- ・年1、2回の学習会では、1～2時間、新聞などで学習する。村の党委員会とは関係ない。
- ・健康診断は村で受ける。自己負担は30～40％。

(孫)

- ・一番上の孫は現在イギリスに私費留学している。大連交通大学を卒業後、公務員試験に合格し、靈石の国税局に勤務していた。渡航時に20万元を所持していた。彼女の両親が支援していた。私は年金から1万5千元を支援した。孫たちには高校入学時には千元、大学入学時には1万元、大学院入学時には1万5千元を年金からお祝いに渡した。
- ・二番目の孫は県内の幼稚園の教師。三番目の孫は湖南農業大学に入学した。四番目の孫は男の子で靈石高校生。五番目も男の子で、中学生。六番目は女の子で小学生。

(退役軍人)

- ・退職時の階級によって補助金が違う。私の場合、年金は3,000元ぐらい。さらに月1,000元の生活補助金をもらう。階級は「営」レベル。3ヵ月に1回、3,000元を年に4回もらう。
- ・解放軍を除隊後、公務員になったら補助金は支給されない。煤運公司に入社したので、補助金を受け取ることができる。
- ・(最近の退役軍人たちの不満やデモについては)知らない。現状に満足している。

(軍隊での党活動)

- ・1958年に入隊し、60年に入隊した。解放軍の中での入隊は難しい。石家庄の鉄道兵学院で3年間鉄道工程を学習した。学院卒業後は、指導員に就いた。
- ・四清運動中は、四清工作隊として黒竜江省綏化県北岡人民公社に派遣された。生産隊に2、3人の工作隊員が派遣された。
- ・私は4人の工作隊の組長だった。軍人2人(男性)、黒竜江大学の男性教授1人、女子学生1人の4人だ。仕事は社会主義教育が主だった。村の幹部は「多吃多占」だった。そこに数か月滞在した。村民とは仲良くなった。農民の家に泊まり、一食数角の安いものを食べた。肉や小麦は食べないと説明した。主食はトウモロコシだった。別れるときには「古い八路軍がきた」と泣いていた。4人の工作隊は皆別々の家に宿泊した。
- ・工作隊は上部が選別した。派遣される前に「23条」を学習した。
- ・私が選ばれたのは、政治幹部だったからだ。もう一人の軍人は軍医だった。
- ・人民公社に派遣された工作隊の三分の一は軍人だ。他は大学の教員や地方の幹部だ。軍と地方幹部、そして地元幹部の三結合によって農民を教育した。軍・民・政府は関係を緊密にした。誰が組長になるかは一定ではない。軍人の階級にもよる。工作隊の団長は県の党副書記だった。
- ・文革時は軍曹として重慶近くの「天府煤砵」にいた。所属の兵団の連指導員だ。鉞山には2、3人の解放軍が派遣された。「天府煤砵」にも造反派の二つの派閥があった。解放軍は二つの派閥に関係しなかった。大きな対立はなかった。
- ・四川省では武闘が終了していた。半年間滞在し、鉞山の労働者たちと同じ食堂で食べた。
- ・重慶の第四設計院にはエンジニアが多かった。派閥はあったが大きな対立はなかった。軍から6、7人が派遣された。
- ・当時は文革の後半期だから、主な仕事は学習の指導だった。
- ・黒竜江省では大興安麗で鉄道建設に従事した。森林を伐採して鉄道で運んだ。厳寒の地で人が少なく、武闘が起こらないところだ。食事は一般の部隊が0.34角のところ、鉄道兵は0.3角の補助が出た。除隊するときは後勤部副営級幹事だ。兵士の時は三等功を受賞。指導員の時は「四好連隊」となった。北京での表彰会に参加した。毛沢東・林彪・周恩来が参加していた。
- ・林彪事件の時は四川省で後勤部に勤務していた。鉄道兵第6師団に所属していた。事件が起きた時は驚いたが、部隊の中では混乱はなかった。
- ・鄧小平時代になると鉄道兵は転職する者が多くなった。第5師団と第6師団は統合され、鉄道部第6工程局となった。除隊後靈石で一緒に活動する者はいない。